

ふるさとの伝統文化に挑戦



鳴高わんわん凧

(文化祭：生徒会企画)

2012(平成24)年の夏、私たちは、わがふるさとの伝統工芸「鳴門大凧」に触れる機会がありました。

「みんな、わんわん凧について知ろう。歴史の長い地元の地域ぐるみの文化だよ。」特活課の松本先生の話がきっかけで、少しずつ興味関心を寄せることになりました。

歴史ある伝統文化 (起源について)

鳴門市撫養地方は、昔から大凧揚げが名物で、岡崎地区「わんわん」、大津町大代「菊一」、大津町矢倉「水仙」など各地域に100種類を超える凧があったそうです。江戸時代、元禄五(1692)年、岡崎地区の蓮華寺本堂の再建棟上の祝いに、棟梁の又右衛門が余興として宇多紙50枚張りの丸凧を揚げ、喝采を博したのが起源とされています。「わんわん」の名称については、このお祝いの時に鏡餅を丹塗りの椀に盛って振る舞ったが、この椀の愛称で重ね呼び出したのが凧の図柄の起りだそうです。

最盛期は1934(昭和9~11)年。数百もの凧が乱舞し、撫養地方では会社をはじめ郵便局まで仕事を休み、町全体が緑り出すほど凧揚げに楽しんだそうです。

(参考資料:鳴門地域地場産業振興センターHP)

7月、地元の「鳴門大凧保存会」の皆さんが、FNS27時間テレビの企画で大凧を作成する！という情報が入りました。直径14mのビッグサイズと聞き、早速見学に行くことにしました。



7月11日、体育祭前日の暑い日の放課後。鳴門市民会館では、保存会の皆さんが、熱心に和紙を何百枚も張り合わせていました。7月14~16日の三連休中も完成までの作業をじっくり見学、少しお手伝いもさせていただき勉強になりました。



巨大な凧は、表と裏を同時に見ながら細かな作業をするのに苦労されていました。保存会の皆さんの熟練の技、気持ちを一つにして取り組まれる姿に、私たちも大変心を動かされました。ふるさと鳴門に、このような文化活動が受け継がれている。大先輩方の気持ちに触れ、熱いものがこみ上げてきました。



「今年の文化祭は、ぜひ鳴高わんわん凧を揚げよう！」刺激を受けた私たちは、まず伝統凧の絵柄について学習。それぞれの地域に個性があり、興味は尽きません。

夏休み中の作成にあたり、「鳴門大凧保存会」会長の藤中梅雄さん、西谷茂さんに大変お世話になりました。

夏休み後半の4日間。いよいよ生徒会執行部による鳴高わんわん凧の制作がスタートしました。

大凧が出来るまで

1日目(8月20日)



まず、凧の基盤である和紙にのり付けをしました。そして床に円を描き、それに合わせるように紙を張り付けていきました。仕上げが、凧の楕円の形になるよう、張り合わせを調整しました。(一割ほど横広の楕円作成)



2日目(8月21日)

風の裏側に弓(竹)を張るための線を記しました。この作業は非常に細かく、少しのミスも許されないので緊張しました。



表に反して、大凧の図柄を描きます。伝統の「わんわん」柄の中に、鳴高の校章を！内側からだんだんと書き込み、白い和紙に鮮やかな校章が浮かび上がりました。



3日目(8月22日)

風の裏側に、前日記した線をもとに骨組み(弓)を付ける作業です。竹を細く切ったものを、テープでしっかり張り付け。その後、のりと紐でさらに固定しました。この作業も揚げるときに重要。2日目と同じくらい繊細な作業でしたが、藤中さんたちの指導にしがたい、鳴高大凧を完成させていきました。作業が一段落した後は、地域柄のミニわんわん凧をあげて楽しみました。鳴高大凧に対する期待がふくらみ、ワクワクしました。



4日目(8月23日)

いよいよ肝心の糸目付けです。凧を引く糸を、何十カ所にも付けます。凧が大空を美しく舞うかどうかは、この作業にかかっています。

表裏から息を合わせて。



文化祭当日(9月5日)

大凧揚げ本番！当日は、朝早くから「鳴門大凧保存会」の皆さん4名が凧の尾(長〜いしっぽみたいなもの)を付けて下さり、鳴高大凧の準備が整いました。

体育館芝生前に場所を取り、糸を引くタイミングの指導を受けました。風は良好、快晴の中、いざ。



「よ〜し、今じゃ。糸を引け〜！」藤中さんの合図。生徒会執行部員、一斉に走りながら糸を引く。「タッタッタッ！」(今回は、校舎の柱に滑車を取り付けて引く)



全長3メートルの鳴高大凧が、蒼穹を舞う姿はまさに圧巻！飛翔した大凧を見上げる瞬間。何度も何度も舞う大凧に、見入っていました。大先輩と楽しく貴重な時間を共有することができました。

多くの仲間が、1つの作品づくりに気持ちを寄せ、息を合わせる。これが、ふるさと鳴門の伝承文化なのだ実感しました。



「鳴門大凧保存会」の皆さんには、温かくご支援いただき、感謝の気持ちでいっぱいです。真夏の貴重な体験、忘れません。本当にありがとうございました。今回の大切な思いを、伝承してゆけたらと思います。